



紅
顏



著者略歴

1937(昭和12)年、兵庫県に生まれる。明治大学文学部卒業後、宣弘社(広告代理店)に勤め、1964年、放送作家として独立、70年から作詞活動始める。著書：作詞入門、36歳・青年 時にはざんげの値打ちもある、ゴリラの首の懸賞金(長篇小説)、魚眼思考、瀬戸内少年野球団。

紅顔期

一九八一年六月一日 第二刷

定価 一二〇〇円

著者 阿久悠

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 東京(二六五)一―二一―

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 矢崎製本

・万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

《紅顏期》
目次

病みあがりの送春曲

1	トビウオの悲劇	7
2	復員ボケ	17
3	大人の匂い	22
4	悪い春	30
5	栄養失調	36
6	老兵は死なず	44
7	純情詩集	51
8	猫と蜜柑	58
9	乙女の性典	61
10	卒業	69

くらやみの恋夏曲

1	暗闇紳士録	77
2	鳥	92
3	軍隊ラッパのオッサン	100
4	インキンと結婚	112
5	ボケの小百合	122
6	夏のあらし 秋へ	133
7	忘却とは	144

空まわりの思秋曲

- | | | |
|---|---------|-----|
| 1 | 恋文屋 | 152 |
| 2 | 泥仕合 | 162 |
| 3 | 兄弟 | 171 |
| 4 | 紙飛行機 | 179 |
| 5 | 秋鯖と赤とんぼ | 188 |

それぞれの感冬曲

- | | | |
|---|-------|-----|
| 1 | 三ノ宮幻想 | 198 |
| 2 | 冬の前に | 208 |
| 3 | 大みそか | 219 |
| 4 | 海の宴 | 222 |
| 5 | 早春苦 | 231 |
| 6 | 急行銀河 | 239 |

日本音楽著作権協会（出）許諾第八一〇七五四六号

紅
顏
期

病みあがりの送春曲

1 トビウオの悲劇

そういえば、あの頃、後頭部の絶壁のあたりで両手を組み合わせ、ちょうどビールの栓抜きのような形のポーズをとる少年が多かった。塀や壁にもたれかかる時もそうだし、校庭などで何気なく立っている時でもそうである。その場の主役の立場にある少年は、さすがにそんなポーズはとっていないが、何気ない脇役、もしくは傍観者の中の何人かは、きまってビールの栓抜きの形をしているのだ。

少年小説の挿絵や、少年画といわれるものを見ると、常識として、あるいは定型として、そんなポーズの少年が描かれていた。

頭が重かったのかもしれない。

いや、それは頭を支える肉体との比較の問題で、極度に貧弱な肉体では、とても頭を支えきれないという不安感が、きっと両手を添えさせたのであろう。

あの頃、誰も彼もが程度の差こそあれ栄養失調であったことは否めない。だから、少年たちは、常に何かに寄りかかっていたし、頭を手で支えたり、右足を左足にからませたりして、頼りない

気分を解消していたように思える。

そう、何がということではなく頼りなかったのだ。自分の肉体のどこかを、自分自身で支えるなり握むなりしていないと、くずおれてしまいそうな頼りなさを潜在的に持ちつづけていた。肉体の機能が脆弱になると、人間は、それを補うために自然の知恵を働かせる。

食糧事情がよくなって来た昭和三十年代以降の少年たちには、このビールの栓抜きポーズは全く見られない。だから、時代のポーズであり、忘れられたポーズなのである。

あの頃——昭和二十五年である。

今ここで溺れて死んだら、新聞には何と出るだろうかと足柄竜太は思った。

トビウオの悲劇。

いやいや、フジヤマのトビウオといわれた古橋広之進選手ならそう書かれるかもしれないが、淡路島の片田舎の名もない中学生に、そのような映画の題名になりそうな見出しは付けてくれるわけがないと、竜太は、正確に自分の立場を見きわめていた。

少し疲れて来た。平泳ぎのストロークが鈍くなり、何度も水を吞んだ。

さっきまで、西瓜畑で日照りを満喫している西瓜のように、幾つもの坊主頭が群がっていたが、今や点々と見えるだけである。そのどれもが、竜太と同じように、泳ぐというよりは浮いているという感じで見えかくれしている。

江坂中学夏の恒例の二千メートル遠泳競技会が行われていた。

恒例とはいっても、正しくは復活第一回である。終戦の年の昭和二十年に中止になり、戦後は思い出す人もなく忘れられていた。たと思ひ出す人がいたとしても、あの欠食児童の筋ばった

裸を見たなら、とても口に出すことは出来なかっただろう。

二キロロー少々しか摂取していない澱粉ばかりの民主主義の子には、二千米を泳ぎきる体力もスタミナもなかったのだ。

それが復活したのは、世の中やや豊かさを取り戻して来た結果といえるかもしれない。

玉蜀黍や高粱を雑炊ですする時代から、ボン煎餅で楽しむ時代に変っていたし、飢餓の度合もやや薄れ、栄養失調という感覚で肉体を見るまでに復活していた。生きるか死ぬかが、健やかか否かぐらいにまでもり返して来ていたのだ。

そして、直接のきっかけとなったのは、日本人としての意欲と自信の復活で、それは、古橋広之進や橋爪四郎や浜口喜博といった日本大学水泳部の選手が、アメリカ選手をおさえて勝利をおさめたという快事に発している。アメリカに勝った。アメリカに勝てる。まさに真珠湾以来の身ぶるいする興奮に、

「諸君。諸君の頭上をおおっていた劣等の暗雲はいまや晴れた。やれば出来る。やらねばならぬ。我らは古橋に続かねばならぬ」

と枯れかけていた中学校長を蘇生させ、但し校長はその興奮で血圧を上げ、しばらく寝こんでしまったが、とにかく恒例の二千米遠泳競技会が復活したのである。

早朝、その校長に見送られて、三十艘の漁船に分乗した男子生徒二百名は、沖合の出発地点を目ざした。

校長は、興奮のあげくの演説が、進駐軍筋に対してやや穏当を欠くという注意を受けたため、その時はとり立てて何もいわなかった。思えば熱い目差しかと感じられる程の目をしただけである。

二百名の男子生徒たちは、沖合二キロの地点で投げこまれ、岸を目ざして泳ぐのである。スピードは問われない。完泳すればいい。どういう形であれ岸に泳ぎつけば、大釜で煮立っている飴湯と、二千米遠泳合格之証という証書が貰えることになっている。

三十艘の漁船は、廃棄物でも捨てるように少年たちを投げこむと、
「^よ饑に飢いつけよ。迷い饑がいるかもしれんよってな。ええか。足食われてもチンボ食われるなよ」

そんなことをいってからかいながら、そのまま漁に出かけて行った。

瀬戸の海に二百の坊主頭が浮いた。

但し、万一の場合を気づかって、体育の先生と校医の乗った船が監視と救助の役目で尾いて来ている筈である。

船の姿は見えない。しかし、大太鼓の単調で眠けを誘うもの憂い音はきこえている。士気を鼓舞するつもりだろうが、あれでは昼下りの肩叩きのようなもので逆に眠くなり、波にのまれてしまふと竜太は思っていた。

それでも、もう半分は泳いだだろう。

真夏の光の中で薄紫色にぼやけていた江坂の町が、家並まではっきりと見えるようになり、今もバスが一台、時々窓ガラスをキラリと光らせながら、七曲りの道を北へ走っているのが見えている。

そのバスの玩具のようのにろい動きを見ながら、そうやなあ、かつぎ屋のオバハンが五人、座席の下に米袋をかくしながら乗ってるやろ、他のお客いうたら一人か二人、もしかしたら祖父の足柄忠勇巡査が乗りこみ、闇のかつぎ屋のオバハンと息づまる神経戦を展開しているかもしれへ

んな、と妙なことを考えていた。

また水を呑んだ。塩分を喉の奥深いところに残して胃袋に流れこんだ。咳が出た。はげしく咳きむと、あらたに水を呑んだ。

腕の力がなくなり、鈍い一かき二かきぐらいでは進まなくなっていた。

竜太は、ごろりと仰向けになり、波の上に寝た。泳法を背泳にきりかえたということではなく、浮袋の調整を誤った鯛のように浮くことにしたのだ。

夏の太陽がまともに目を射た。

そして、青空だった。

この青空から、B 29の姿が消えてもう五年が過ぎていた。

もしも、ここで溺れて死んだら、新聞は何と書くだろうかと、また思った。

「少年水死」

多分この四文字で終りだろう。まさか、少年野球江坂タイガースの名三塁手というふうには書いてくれないだろう。やはり、少年水死以上のことは思い浮かばなかった。

美空ひばりならどうだろう。あの天才少女歌手、「悲しき口笛」や「私は街の子」の美空ひばりが、同じように瀬戸の海で溺れ死んだら、少女水死の四文字では済まないだろう。

ひばりはひばり。魚は魚。

なんて見出しになるかもしれない。

おそらく新聞の一面ぐらいはついやして、この偉大な天才少女の誕生からの足跡、戦後の荒廃を如何に救ったかという業績、そして、各分野の著名人の最大級の哀悼の辞で埋めつくすに違いない。笠置シヅ子も何かいうだろう。岡晴夫も、田端義夫も、小畑実も。そればかりじゃない、

大下弘や川上哲治や、もしかしたら、吉田茂総理大臣や、あのマッカーサー元帥も一言あるかもしれない。

丘のホテルの赤い灯も

胸のあかりも消えるころ

.....

瀬戸の海に浮かんで、というよりは、わずかに顔の部分だけ残して沈みながら、竜太は馬鹿馬鹿しいことを考えていた。

美空ひばりも昭和十二年生れ。足柄竜太も昭和十二年生れ。

同じ年齢なのに、えらい違いや。

シルクハットにタキシード、ステッキを脇にかかえて斜めに傾いた「悲しき口笛」の美空ひばりを思い浮かべながら、竜太は小便をした。

海水パンツの中が生あたたかくなり、

「あああ……」

竜太はのどかな欠伸あくびをもらした。

太鼓の音が近づいて来た。

水につかっている耳の鼓膜に、クイックイックという櫓この音も響いて来て、

「足柄ッ、大丈夫か？」

と監視の先生の声がすぐ近くでした。

「大丈夫です」

「ほんなら、しっかり泳がんかい。こんなこっちゃ瀬戸内のトビウオにはなれんど」

「ファーイ」

瀬戸内のトビウオかいな。ベラか、キスカ、カモジャコぐらいにはがんばってみます。

竜太はふたたび泳ぎはじめた。

淡路島西海岸、通称西浦の middle に位置する江坂町が北から南まで全部見渡せた。時々小さいうねりや波頭が小さくもあり大きくもある江坂町を見えかくれさせたが、竜太は目をこらして、その風景を見つめていた。

エッホッ、エッホッ、エッホ。

竜太は、ゆっくりと掛け声をかけながら、蛙泳ぎをつづけている。

もうちょっとや。もうちょっとや。

北の七曲りの先に、宿敵大宮ジャイアンツのある大宮町がかすみ、南の天狗の鼻のかげには、山名ドラゴンズの山名村があった。

江坂町は夏景色の中に眠っていた。

岸に向って竜太は泳ぎつづけた。

その右前方に八の字に伸びた突堤と赤い灯台が見え、その奥に連絡船が発着する栈橋がある。漁船はいない。日の暮れには港内うずまりそうになるが、今は機帆船が何艘か夏の陽をあびているだけだ。

港のはずれに松林、その中に唯一の観光旅館が見え、その背の崖上が墓地、そして、新田寺につづく。

半農半漁、人口七千の江坂町はやはり眠っていた。時の嵐も知らぬげに、高いびきともいえる不敵な熟睡をつづけている。

町並が見えた。瓦の屋根がまぶしく光った。小学校が見え、そして、中学校も見えた。太い煙突からのどかな煙をたなびかせているのは、ソース工場に違いない。

竜太たちが泳ぎつく砂浜は、海水浴場とよばれていて、それは隣町の大宮松原にくらべるとはるかに小規模であったが松林もあった。

一度は姿をかくしていた級友たちの坊主頭が、波打ちぎわ近くなって、また群がって来た。

波にもまれて頭が鉢合せしそうになった顔々を見ると、すべて江坂タイガースのメンバーばかりだった。

「懐しいのう」

バラケツこと正木三郎が野太い声を出し、ウヒャウヒャと笑った。

ガンチャもいた。照国も、アノネも、ニンジンも、ボラも、ダン吉もいた。全員そろって、ガボガボと塩水を呑みながら、目に友情の光をたたえて微笑み合った。

疲労を忘れ、いい気持になった。

チームワークちゅうもんや。

いや、似たりよったりちゅうことか、どんぐりの背くらべちゅうことか。

飴湯が煮立っているであろう大釜も見えて来た。それをとって囲む世話係の女生徒の顔も誰と識別出来る近さになった。

古橋、ゴールまで後十メートル。

古橋！ 橋爪！ 古橋！ 橋爪！

嗚呼！ 感激はよみがえる！

昭和二十四年八月十六日、ロサンゼルス of 全米水上選手権大会で、自由形一五〇〇、八〇〇、